

転依——二分依他

——『撰論』金・土・蔵の譬喩の解明を通路として——

竹 村 牧 男

仏教では譬喩が多用されるが、鉾石の中の金という譬喩は、特に如来蔵系經典を中心によく使われている。そして唯識論書にはこの流れをつぐ譬喩として、金・水・虚空の譬喩が見出される。さらに『撰論』にはこれに類する金土蔵の譬喩なるものが説かれており、この譬喩に託して二分依他および転依の思想が説かれている。そこで、上述の一連の譬喩の検討を経た上で、転依および二分依他の思想を究明してみたい。

まず、唯識論書に見られる金・水・虚空の譬喩を調べてみよう。初めに、『弁中辺論』に見られるそれは、真如・實際等と同義でもある空性が、自性として不変であることの譬えとして使われている。空性には雑染・有垢と清浄・無垢の差別があるが、有垢から無垢へは変異なのではない。ただ客塵が離れるだけであり、自性が他のものになるのではない。このことを明かすために、金・水・虚空の譬喩が使われているのである⁽¹⁾。

次に、『大乘莊嚴經論』に使われているものを見ると、「法の真実を尋求することに関する二頌」の中で三性を説いており、その中の円成実性を表わすものとして金・水・虚空の譬喩が使われている。ここでは、円成実性は無言説・無戲論を自性とする、とされており、また無垢清浄でかつ本性上も清浄であるものとされている。この、特に本性清浄の意義を表わすものとして、金・水・虚空の譬喩が使われるのである⁽²⁾。

次に、『瑜伽論』においては、転依に関してこの譬喩が使われている。同論に「此転依性、皆無動法。無動法故、先有後無、不応道理。又此法性、非衆縁生、無生無滅」とあり、転依、いいかえれば法性は無動法であり、不生不滅だと主張されている。そしてこのことの説明のために、金・水・虚空の譬喩が使われるのである⁽³⁾。

なお、『顯揚論』でも、転依が常性であることの譬喩として、「真金の調柔性」が用いられている⁽⁴⁾。

以上によれば、『瑜伽論』『顯揚論』では、金等の譬喩が転依と結びつけて説かれていた。また『弁中辺論』でも、『安慧釈』によれば、それはやはり転依と未転依によつて解説されている。⁽³⁾ところで、このように金等の譬喩と転依との結びつきを詳細に説くものが、『法法性分別論』である。そこでは、まず、転依は他に転じたのだから変異したのではないか、の問いに對し、決して変異したのではないと答え、そのことの譬喩として金・水・虚空の譬喩があることを告げる。そして、それらはみな、自性清淨であり、ただ客塵によつて清淨でなくなるが、それを離れば清淨となるのであつて、これは、新たに清淨になることでも、変異したものであるという理路を表わす、と説明する。その上で、転依については次のように述べている。

そのように転依においても、自性として明淨なるものは先に無なのではなく、客障が顯現するが故に（明淨が）顯現しないだけである。（虚空の）不淨と、（金の）無妙と、（水の）非清澄のようである。それ（客障）を離れる故に（明淨は）顯現するのであるが、法性（自体）が変異を具する故に変異が現われて（明淨が）不生から（新たに）生じたのではない。そうでないからこそ、法性と、それによつて言い表わされる転依は常である。⁽⁴⁾

ここでもやはり、法性そのものでもある転依が、変異するものではなく常性のものであること、その内容は明淨である

ことの譬喩として、金・水・虚空の譬喩が使われているのである。

以上、唯識論書では、金・水・虚空の譬喩がしばしば見られるが、これらを整理すると次のようになる。

1 金・水・虚空の譬喩は、転依の論理を闡明するものである。

2 転依は即、法性として表現され、それは空性・真如等、また円成実性等と同義でもある。

3 そこで、転依は、変異ではないと強調され、常と表現される。「転」とは、ただ法性が不可得（不顯現）から可得（顯現）へにすぎない。変わるのは客塵が離れることである。

4 転依の性格は本性清淨で代表される。

一方、『摂論』の金土藏の譬喩は次のようである。まず、法性に三種あり、それは雑染なる遍計所執性と、清淨なる円成実性と、その二者に属する依他起性であることが説明され、その譬喩として次のように説かれる。

この意義において、譬喩は何があるか。譬喩は「地中に金があること」である。たとえば、地中に金があるときは、地界と、土と、金との三が可得である。そこで、（普通）地界においては、無なる土が可得であるが、有なる金は不可得である。そして火によつて（地界が）焼かれるとき、土は顯われず、金が顯現する。地

界は、土として顕われるとき、虚妄として顕現している。金として顕われるときは、如として顕現している。そういうわけで、地界は二者の分に属するのである。

そのように、識において、無分別智の火によつて焼かれないことによれば、識は虚妄な遍計所執性として顕われるが、如実な円成実性としては顕われない。識において、無分別智の火によつて焼かれることによれば、その識は、如実な円成実性として顕われるが、虚妄なる遍計所執性としては顕われない。そういうわけで、虚妄分別なる識の依他起性は二者の分に属するのであり、（それはあたかも）地中に金があるときのようなものである。

ここで、金土蔵の譬喩が二分依他説の譬喩として使われているのは明了であるが、その内容は、先に見る転依の事態と同様だといえよう。事実、後（果斷分）に転依は二分依他であるとの明記もある。

さて、この譬喩を前にならつて整理すれば、次のようである。

- 1 金土蔵の譬喩は、二分依他Ⅱ転依の論理を闡明するものである。
- 2 地界の金は、依他起性中の円成実性を表わしている。
- 3 二分依他という事態は、虚妄・分別・識なる、依他起性中、顕現している遍計所執性が滅し、潜在的な円成実性が顕現することである。

転依—二分依他（竹村）

4 遍計所執性は虚妄であり、円成実性は如実である。

さて、以上の金・水・虚空の譬喩と金土蔵の譬喩を比較検討してみよう。まず、どちらの譬喩も転依を明かすものとして共通だといえる。しかし金・水・虚空の譬喩では、転依が法性として表現され、転依の主題はあくまでも金等に喩説される法性にある。そこで転の内容は本性清浄から無垢清浄へであつて、実質的に変異なのではない。一方、金土蔵の譬喩では、主題は金にあるのではなく、依他起性にある。そこで転の内容は、依他起性を場としての遍計所執性から円成実性へである。しかしこれは、依他起性そのものが、遍計所執性となり、その遍計所執性が円成実性になる、というのではない。依他起性は永遠にかかわらず依他起的なあり方においてある。ただ、そこを場として、遍計所執性が顕現から不顕現へ、逆に円成実性が不顕現から顕現へと、二重の動きが交差するのである。ここで注意しなければならないことは、金土蔵の譬喩においても、自性清浄から無垢清浄へという、法性を主題とした転依の見方も含まれているということである。それを主題の地界ではなく、地中の金が表わしている。円成実性の不顕現から顕現へは、ある時を境いに先無なるものが有となるということではなく、無始来、依他起に即して備わっている円成実性が、智に照らされて表面に出てくると

いうことなのである。というのは、雑染の依他起でさえ、それは縁起・空であり、そこに空性が有るからである。この空性が、不顕現から顕現へ転ずる。このとき、金土蔵の金は、金・水・虚空の金等と同一の理路を表わすものとしてある。

しかもこの二分依他——転依は、依他起性・虚妄分別なる識において説かれてゐる。すなわち、金なる円成実性・法性は、全八識の虚妄分別そのものに即して考えられるべきであり、何か第九識的な、識の根底にあるものとして考えられてはならない。ということとは、転依というときの所依が依他起性だということ、それは阿頼耶識に局限されないということである。所依の語から直ちに阿頼耶識を想うのは皮相な見方である。転とは、あくまでも不顕現（自性清浄）から顕現（無垢清浄）へである。故に所依が（を）転ずるというより、むしろその転がおこる場が所依である。この思想的意味において、転依を転之依（転ということのための所依）と依主釈に解する法相宗の立場は深く正しい。この所依を法性と示すのが初期の転依理解であつたが、『撰論』は自性清浄から無垢清浄へと、それに伴う客染の有から無へを総合的に捉える視野に立つて、依他起性と提示したのであつた。ともかく、転依は法性（現象界に即した実性）か依他起性（実性を具した現象界）において語られたのであつて、阿頼耶識思想の整備により、その実際が種子の断滅等によつて説明されるに至るにせ

よ、阿頼耶識が所依なのではなかつたのである。

また、二分依他は、確に、依他起性が遍計所執性として顕現している時と、円成実性として顕現している時との二分を意味するであろう。これは時を異にしての二分である。しかし金土蔵の譬喩にあるように、金はもともと地界にあつたのであり、すなわち、依他起性中には、それが遍計所執性として顕現していようと、その直下に、自性円成実としての円成実性があるのである。この場合、時を同じくしての二分である。この同時二分を基にして、一方で遍計所執性が顕現から不顕現に、他方でこれに逆比例し、円成実性が不顕現から顕現に転ずるわけである。この両者のダイナミズムを二分依他は表わす。つまり、常に同時の二分を基にして、異時に二分なのである。二分依他説はそうした総合的なひろがりの中で解釈されねばならない。この時、三性説は、単なる転換の論理ではなく、重層の論理、或は重層的転換の論理というべきであろう。

- 1 長尾本、二四頁三—五行。
- 2 レヴィ本、五八頁、一四—二三行。
- 3 大正蔵、三〇、七四八、中。チベット北京版、No五五三九、Vol H、一三九、上、四一六。
- 4 大正蔵、三一、五七八、下。
- 5 山口本、五一頁、一九—二〇行。
- 6 山口益還曆記念『印度学仏教学論叢』所収テキスト、四四頁一行—四五頁五行。
- 7 佐々木漢訳四本対照本所収チベット訳テキスト、七〇・一〇行—七二・四行。
- 8 会本成唯識論第四、四七一頁。（注は最少限にしました。）